

出典：名古屋大・教育・02年

解答

問1

ラスコーリニコフは、殺害後彼のなかに変な感覚がやってきたゆえに落ち着かないのである。その感覚とは、殺害後に彼が交わした母と妹との話の続きを自分がするときには二度と来ないだろうというものだ。では、彼はなぜそう思ったのか。それは、彼が他人を殺害した結果として、自分が他人から人間と見られなくなり、他者の承認を必要とするアイデンティティの意識が揺らぎ、また平常心では何があっても人は殺してはいけないと思っっている人間意識も揺らいだため、誰とも心を開いては話せなくなっている自分を知ったからである。

問2

【文章例 賛成論①】

私は筆者の考えに賛成する。人間が社会的存在であるということは自明なことである。よって人間としてのアイデンティティとは自分は社会の一員だという意識であり、それなしには人間は生きていけないのである。肉体的暴力ではなく無視といういじめを受けて自殺することはよくあることだが、それはそのことをよく示している。人を殺してはいけない理由を社会的秩序の崩壊に求める人もいるが、それは殺人を行いアイデンティティを失った人間が多くなる、その結果として生じる現象である。少なくとも、殺人の禁忌を自らに課す主体が個人にあるなら、人を殺してはならない理由は社会秩序の崩壊ではなく自分にとってまずよくないと思うことにあるのだ。

【文章例 賛成論②】

神や絶対的永遠的なものとしての規範を信じる人は筆者の考えに反対するだろう。しかしラスコーリニコフは現に人を殺し、その後には神や規範に照らしてではなく母親に対して落ち着かないでいるのだ。その落ち着かなさの発信地である彼の自己意識の根拠は自己と他者との関係性にある。つまり人間の自己意識は自己のなかで閉じていたり完結していたりせず社会や他人に開かれたものとしてあるのだ。だからこそ人を殺して他人や社会から疎外されることを防がなくてはいけないのである。それは決して観念的な問題ではない。なぜなら、自己意識を宿すところの自己の身体は自己がこの社会に生まれ出るそのときから個性と同時に共同性をもっているからだ。

【文章例 賛成論③】

自分にとってまずよくないことだからという筆者の考えは明快である。我々人間にとって最も大切なものは自分であるということ、各自が自分の心をまっすぐに覗き込めばわかることだ。しかし注意したい。筆者は決してそれがすべてであるとは言っていないのである。自分にとってまずよくない、そういう理由がある、と言っているのだ。つまり、自分にとってよくないからというのは一つの理由にすぎないのである。幾つかある理由の一つとしてなら誰も筆者の考えに異論はないはずだ。私も例えば、いけないものはいけないのだ、殺人の禁忌は絶対的規範なのだと思うている。しかし筆者の考えを否定する積極的理由もたないし、また存在しないと考える。

【文章例 反対論①】

人を殺すとアイデンティティが揺らぐという筆者の考えは人を殺してはいけないという規範が前提である。しかし今日そのような規範自体崩壊している。それは、現実には殺人が多発しているからというだけでなく日本には規範の一つの出自である「公」が本来的に存在せず且つもう一つの規範の出自である共同体が崩壊してしまっているからだ。そして、それゆえに我々にとっての他人は最早テレビや携帯電話といった仮想現実の中にしか存在しないのである。その仮想現実においては元より規範は考慮の外である。それどころか殺人は時に積極的に容認される。我々に人を殺してはいけないと考えるときがもしあるなら、それは単に面倒なことを回避したいからだ。

【文章例 反対論②】

私は筆者の考えに反対だ。生命は人間がつくり出したものではなく人間を超えた力がつくり出したものである。よって殺人は人間に

とつて絶対悪と言えるものであり、決して他人との関係に照らしてその是非を判断すべきものではない。同じ理屈によって自己の人間としてのアイデンティティは他人の承認を必要とせず、また必要としてはならないものだ。たしかに、人を殺す殺さないは我々と我々の置かれた状況の関係から生じると言えるし、人間が単独で存在するのではない以上他者との関係は我々の存在のあり方を規定する。しかし我々が人を殺してはいけない理由は他人がどう見るかということにはなく、あくまで自己の良心と生命の尊厳にあるのだ。

【文章例 反対論③】

言うまでもなく人間は自由であるべき存在であるが、その自己の自由は他者の自由によって初めて保障される。そのことは自由の前提には命というものがあるゆえに自己の命は他者の命によって存在し得るということをも意味する。それは人間が社会的諸関係の総体であるといったことは違うもつと根源的なことだ。そしてそのような自由や生命が本質的にもつ共同性にこそ人を殺してはならない理由がある。つまり我々が人を殺してはならないのは自分にとってまずよくないからではないのだ。なぜなら、私の考える他者は「自分がこの世で唯一大切だと思う自分」を承認してくれる他者ではなく不完全な人間である自分とともに生きてくれる他者だからである。

解説

1 課題のねらい

殺人の禁忌の理由について考えることは、一般的に見ても人間にとって大切なことであるが、ことに教育に携わる者や医学・医療に携わる者には重要かつ必要不可欠なことである。では、医学系学部志望者としてはこの課題をどのようにとらえたらよいのだろうか。

第一に、殺人というものがつまりは人間の命の否定であり、その尊厳への侵犯であること、一方医学・医療というものは人間の命の肯定であり、その尊厳の擁護である、という対立関係にあることを考えれば、おのずと明らかである。たしかに今日の医学医療においては、近代西洋医学が死を敗北とみなしたことの反省から死の医学の必要性が言われている。しかし、それは決して命の否定やその尊厳への侵犯を意味しない。むしろ命を肯定し、その尊厳を擁護しようとするゆえにこそ死の医学の必要性が言われているのである。

第二に、医学や医療は社会の状況とさまざまな形で深い関係をもっていることは言うまでもないことである。また、医療の対象で

ある患者はまず人間としてこの社会に存在している。ゆえに医学や医療に携わる者は社会の状況やそこに生きる人間について知っておく必要がある。そして、そこに殺人の問題を通して人間やその社会について考えている本課題文を医学・医療を志す人間が読み、間に答える意義がある。したがって、この課題には、医学・医療を志す者として、人間や人間を取り巻く社会をどう理解しているか、臨床の現場などで患者および命というものにどう向き合うつもりでいるかを問うねらいがあると言える。

2 課題文の背景

数年前の少年による猟奇的と言われた殺人事件やその前のオウム真理教事件をめぐって一人の若者が公共の場で「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いを発したが、課題文の書かれた背景にあると思われる。これに類した問いとして「なぜ自分の身体を売ってはいけないのか」という問いがあり、それは言うまでもなく援助交際などの広がりや背景にもつものだ。いわゆるモラル・ハザードが若者に対して言われるようになったのは、そういった一連の社会現象によると言えよう。しかし、共同体の崩壊、経済の破綻などによって大人もまたモラル・ハザードの状況にあり、先のような若者の問いにうろたえ答えられない大人の姿はそのことを証明している。筆者はそうした、今日の社会の状況を見て今まで放置されてきたと言える倫理的な主題をラディカルに問い直す必要を感じ、この文章を書いたものと思われる。

問1について

① 設問要求

- | |
|--|
| <p>① 傍線部(1)の「何か落ち着かない」について、青年ラスコーリニコフが「落ち着かない」理由を筆者はどう捉えていると思
うか、述べること。</p> <p>② 自分の言葉で述べること。</p> <p>③ 二五〇字以内で述べること。</p> |
|--|

筆者の捉え方を述べよというこの問の答は、国語の読解問題と違って単に傍線部の前後を読んで答えるというわけにはいかない。ドストエフスキーの小説『罪と罰』の主人公である青年ラスコーリニコフの「何か落ち着かない」という気持ち・状態の理由こそ、

問1で述べるべき、「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いに対して筆者の試みた解答の核を成すからであり、またその解答は第一段落から順を追って説明されていることの帰結として資料文の最後部に示されているからである。

また、先に確認したように自分の言葉で述べよと求められているということは、キーワードを拾ってただ並べれば済むものではないということの意味する。しかしまた、「落ち着かない」理由について自分の解釈を述べるのではなく、あくまでそれについての筆者の捉え方を述べる、つまり筆者の考え方を説明することが求められているのである。

以上の点に気をつけて問に答えよう。

では、課題文の内容を段落ごとの要点を押さえることで見ていこう。また、筆者の論点・主張・論拠はそれぞれの段落に示されているかを見ていこう。

② 課題文の内容と構成

・第一段落のポイント

人を殺しちゃいけない、身体を売っちゃいけない、差別をすべきじゃないということがこの数千年の間に、社会の進展とともに人間と社会に倫理として浸透してきた。

・第二段落のポイント

モーゼの十戒の「汝、人を殺すなかれ」は、そうでないと人間社会が成り立たなくなるからである。家のほうはいま崩壊が囁かれている。なぜ人を殺してはいけないのかという問いは人間社会のたがのゆるみの一つの指標である。

・第三段落のポイント

なぜ人を殺してはいけないのか。人は自分を人間だと思っている。なぜかと言うと、自分を知っている他人が自分をそのように見てそのように承認してくれていると確信しているからである。つまり、個人の自意識、オレはこういう人間だというアイデンティ

テイの意識には「他者の承認」ということが条件として組み込まれているのである。そして、人間だという意識はこのアイデンティティの一番の下部構造をなしている。

・第四段落のポイント

人間は、平常心では何があっても人は殺しちゃいけないと思っている。そのようにして僕の人間意識は成立している。

・第五段落のポイント

その僕が自覚して人を殺したとする。(そのとき) 大事なものは、どう他人が思うかではなく、どう他人が思うかと僕が思うかということである。それが、他人の像が僕の自己意識に持つ意味にほかならない。(殺人をすれば) 僕には他人に人間として見られないだろうという確信が生じる。すると僕の中で自分が人間であるという意識、アイデンティティが揺らぐ。

・第六段落のポイント

親鸞は、人を殺す殺さないはその人とその人の置かれた状況の関係から生じると考えたほうがいいと言う。

・第七段落のポイント

人を殺してしまう場合には、その人の中で、一度壊れた人間がどのようにどこまで再修復されるかというドラマが生じる。

・第八段落のポイント

ドストエフスキの『罪と罰』のラスコーリニコフが金貸しの老婆を人類的な理想実現のため、殺してはいけない理由はないという理論を実行するため殺した後、彼に変な感覚が生まれる。世界で一番愛している母と妹と話をしても何か落ち着かない。「その話は後でしょう」と話を打ち切るが、その時、絶対にそんな時はもう二度と来ないだろうという感覚が彼にやって来る。

・第九段落のポイント

なぜ人を殺してはいけないのか。人間としてのアイデンティティを失うとは、誰とも心を開いては話せなくなるといふことだ。だから、人を殺すのは、自分にとってまず、よくない、そういう理由があると思う。

以上が課題文の骨子だ。構成を整理してみると、

論点 ↓第三段落第一文

筆者の主張 ↓第九段落

主張の根拠 ↓第一～八段落の分析

傍線部(1)「何か落ち着かない」理由 ↓第三・四・五・六・八段落の分析を中心とする。

「何か落ち着かない」理由を、指定字数に照らして右記該当段落からさらにその要点を絞り込むことで述べよう。そのとき、わかりやすくかつ論理の通った文章となるように気をつけたい。

問2について

① 設問要求

- | |
|---|
| <p>① 課題文で筆者は「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いに対してひとつの解答を試みている。筆者の考え方に対する自分の考えを述べる。</p> <p>② 三〇〇字以内で述べる。</p> |
|---|

② 論述へのアプローチ

問1を踏まえて課題文で「なぜ人を殺してはいけないのか」について筆者が試みたひとつの解答、筆者の考え方をとらえ、それについての自分の考えを述べることになる。

つまりは、筆者の考え方に対する自分の賛否を表明し、なぜその立場をとるのかを説明するわけである。そして、反対論の場合は問1で押さえた第一〜八段落から読み取れる「筆者の考えの根拠」に切りこんでいくことになる。

ここで、君が自分の立場を定めその理由を述べるに当たっていくつか注意すべき点が課題文中にあるので、それをアットランダムにピック・アップしてみたい。これらは、自分の賛否の立場の決定やその理由のひとつの手がかりにもなる。これらの点について自分の疑問点を書き出したり賛成の理由を書き出したりして、論述に活かそう。

◆筆者が、人を殺してはいけないなどの規範は人間と社会の倫理として浸透してきたと述べている点。

◆モーゼの「汝、人を殺すなかれ」はそうでないと人間社会が成り立たなくなるからだろう、としている点。

←
殺人をしてもよいならみんなが殺人をして社会が壊れる。つまり共同体の存続のために人を殺してはいけないという考え方が示されている。

ただし、結論部に示されている主張から筆者は少なくともその理由を最大・最重要なものとは考えていないことがわかる。したがって、共同体は別の要因で今日崩壊状況にあり、殺人はむしろその結果の現象と考えているのではないかと思われる。

◆筆者は、「人を殺すのは、自分にとってまず、よくない、そういう理由があると思う」と述べている。

←
「まず」ということは、他にも理由があるということである。それが真っ先にあるということであって、それが唯一の理由であるということではないだろう。それはなんだろうか。

◆なぜ人を殺してはいけないのかという問いは、人間社会のたがのゆるみの一つの指標としている点。

←
今日、そういう問いを発し考えることが必要になった。つまり、共同体と規範が崩れつつあるという認識に筆者は立っている。

◆筆者が「人を殺すことはいけないことだ」と考え、その理由を探っている点。つまり、人を殺すことは本当にいけないことなのかという問題意識はもっていない点。

← 「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いは規範自体への問題意識をも含有しているが、筆者は規範自体の価値は不問に付しており、人は「平常心では何があっても人は殺しちゃいけないと思っている」とのみ述べている。

◆人はある状況のなかではつい人を殺してしまうことがあるといっている点。

← 状況が殺人を生むということは、筆者が性善説に立っていることを示すのではないか。

◆課題文においては示されていない、だれにとって殺人はいけないことなのかという、自らに殺人の禁忌を課す主体の特定について。

← 法治国家において唯一死刑制度が「国家による殺人」を肯定しているが、この課題でそれをそれ自体として扱うことは適切でない。個人にとって、共同体の成員にとっていけないこと、と理解すべきである。

以上のような点に留意して問いに答えていこう（ほかにも気づくことがあるだろう。自分で書き出してみよう）。なお、以下の点にも留意して論述しよう。

・筆者の考え方に反対の場合、その理由だけでなく、自分は「人を殺してはいけない」理由はなんであると考えるかを示そう。

三〇〇字の短論述だが、反論想定してそれに備えることよ。また、字数的に可能であれば具体例を入れたい。